

2024 優駿エッセイ賞  
グランプリ(GI)  
受賞作

# 今はただ、彼のよう

た  
や  
と  
き  
ね  
田谷季音



受賞のことば  
エッセイを書いている時間は、自分と向き合っている時間でもありました。虚飾を剥がし、次第にあらわになっていく等身大の自分を、出来るだけ素直に言葉にしたつもりです。文章力があれば、もっとうまく書けたのではという思いもありますが、今の実力を受け入れ、この名誉な賞に恥じぬよう、歩んでゆこうと思います。  
最後に、お世話になった方々へ、この場を借りて感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

プロフィール  
千葉県出身。東京都の開成高校に通う。男子校の雰囲気と毒され、ウマ娘のコスプレをした経験もある。大学受験が迫っているが、勉強の合間に競馬を観戦。好きなサラブレッドは、パンサラッサ。

朝の四時三十分。東の空が薄明りをたたえる頃、僕はベッドから身を起こす。高校生としては早起きだが、これでも家族で一番ではない。父は二時間も前に職場であるトレセンに向かっており、玄関脇の駐車スペースはいつも、ぽっかり空いている。一人で食べる僕の朝食は、決まってトースト一枚と一杯のスポーツ飲料。五時過ぎには乗馬苑に行く準備を済ませる。夏休みが始まってから、月曜日以外は毎日馬に乗る日々が続いている。

美浦トレセンのすぐ隣に乗馬苑はある。着くとまず厩舎にあるホワイトボードの、自分のネームプレートが所定の位置に動かす。これが出欠表替わりなのだ。少年団一年目のプレートには、青いテープに数字の「1」と姓名がプリントされて貼り付けられている。後から来た他の団員達も同じようにそれぞれのプレートを動かす。そのほとんどが僕より年下だが、彼らは先輩だ。

初めて競馬学校の騎手課程を受験したのは三年前、中学三年生の時だった。きっかけはある日、父が過去に騎手を目指していた、というのを知ったことだった。今まで親の期待を背に、受動的に生きてきた僕は、父が期待してくれそうな進路を選び出した。当然、走り込みや懸垂といったそれなりのフィジカルトレーニングを積んでから試験に臨んだが、結果としては一次不合格だった。

今となっては振り返れば、それは当然の結果だと思うが、当時はかなりショックだった。中学受験をし、中高一貫の、いわゆる進学校に通っている僕にとって、試験というものは、好成绩を取り、合格し、褒められる結果を生むものでしかなかった。その試験という機会で、明確な「不合格」を叩きつけられたのは、人生で初めての経験だったのだ。そのショックが尾を引いて、翌年は受験しなかった。ほとんど自信を喪失していたのだ。

それからしばらく、僕は騎手になるという目標を忘れていたつもりだった。しかし、自分から競馬に触れ、知らず知らず世界を知っていくうち、心のどこか深いところまで埋まったままだったその目標は変質してゆき、誰かに期待されるためのものではなく、いつしか「自分の」夢になっていた。そして、取り扱う事のできないほどの根を心に張っていた。僕はパンサラッサという馬によって、そのことに気づかされることになる。

2022年、中山記念。そのレースで僕はパンサラッサを知った。前年の福島記念を勝つてすでに重賞のタイトルを得ていたが、出走馬の中にはGI馬もいて、レースが始まるまで、僕の中では数多い重賞馬の一頭でしかなかった。鞍上にはベテランの吉田豊騎手。レースが始まると、終始その腕が激しく動いている。大逃げだった。僕が今まで見たことがない競馬だった。彼がゴール

板まで逃げ切った時、自分の心臓がバクバクしていることに気づいた。なんだこの馬、頭おかしんじゃないか——。パンサラッサはその次のレースで海を渡り、ドバイターフを勝った。鞍上はそのまま吉田豊騎手。海外遠征となると外国人騎手やリーディング上位のジョッキーに乗り替わってしまうことが多いなか、その統投がうれしかった。

そして同年の天皇賞(秋)である。スタートからハナを取り切ったパンサラッサは当然のように大逃げをかました。三コーナーまでで、後続とはとてもない差が開く。イクイノックスが猛烈な脚で追い上げるまで、彼が2000メートル、逃げ切ってしまうかに見えた。最後の一ハロンから、テレビの前で腰が浮いていた。レースの後、心の中で、何かが溢れていく気がした。僕は意を決して父の部屋の扉を叩いた。

もう一度、騎手を目指したいんだ。父にそう伝えた時、こらえきれなくなって涙がこぼれた。どうして泣いてしまったのか、確かな理由は今も分からない。自分の思いを曝け出すことに馴れていなかったのかもしれない。しかし、何もせずに後悔するのは嫌だった。「後悔しないためではなく、合格するために行動しなさい」

三日後、父はそう言っただけで了承した。

二度目の受験。僕は一次試験を突破した。嬉しかった。同時に、すごく驚いた。四月から乗馬に通い、二年前に比べてわずかながら下地があったとはいえ、高校二年生の年齢で、数か月程度の乗馬歴しか持たない人間が選ばれる可能性は低いだろうと分析する自分が常に存在していたからだ。続く二次試験の合格者の中に僕の名前はなかったが、ショックより、来年も挑戦しようという気持ち、ごく自然に湧き上がっていた。

乗馬苑の乗馬スポーツ少年団の募集は毎年一月に始まる。今年、僕はそれに応募した。応募対象が小学五年生から高校三年生だから、ギリギリの年齢である。しかし抽選に当たったのだから、僕は幸運だった。こうして、四月から僕は、十七歳でありながら、一番の下っ端団員となった。

少年団の活動日は毎週土日と祝日。夏休みなどの長期の休日は、月曜日以外の毎日だ。

毎朝、まずネームプレートを動かしたら、厩舎脇のボックスから箒を取って敷地内の掃除が始まる。時間になると集合して、今度は馬房掃除。終わればホワイトボードに戻って騎乗馬を確認する。乗馬苑に在籍している年数や技量に応じて先生達が決める。馬の数は限られているから、一頭につき二、三人が割り振られる。騎乗馬を確認したら鞍やハミといった道具を持って、騎乗馬の馬装をする。それから運動が始まるのだ。年数と実力順に馬場が三つに分かれており、大馬場、中馬場、角馬場のうち、僕はたいして中馬場である。自分の乗り番を待っている間、ボロ拾いしたり、馬場を均したりするのは後輩の役割だ。運動が終われば、念入りに手入れをする。馬に乗ることに関して、大抵のことは自分たちでこなさなければならぬ。最後に道具の手入れなどをすれば少

少年団は解散となる。一般の乗馬クラブより厳しいが、その分、鍛えられることは間違いない。

競馬学校の騎手課程を受けるような人は、上のクラスである大馬場か、中馬場でも一鞍目に乗っている。当然のように、彼らは上手であった。巧みに障害を飛んで見せる中学三年生の騎乗を見た時、僕の中で不意に、不安が首をもたげた。試験では彼らと、あるいは彼らより技術のある人達と競わなければならないのだ。自分に勝ち目はあるのだろうか？

不安はもう一つある。今年の試験でダメだったら、そのあとはどうしようか、というものだ。僕は既に高校三年生で、一般的には冬に大学受験を控える身分なのだ。にも関わらず、僕は馬に乗っている。僕は時折、この不安を正視しなければならない。団員達と雑談していると、彼らはストリートに、落ちたらやばいじゃん、と言うし、先生達の場合は少し言葉を変えて、別の選択肢は考えてあるのか、と尋ねるのだ。学校の同級生達は今こうしている間も、塾の夏期講習に出たり、自宅や図書館で勉強しているのだろう。進学校に通う高校三年生の夏休みは、本来そういう期間であるはずだ。先のことを問われる度に、僕は言葉を濁らせた。うーん、あんまり考えてないけど、もしそうだったら、大学受験はするんじゃないかなあ。

傍から見ても、リスクなことをしていと思う。去年は二次試験まで残ったとはいえ、今年、合格できる確証はない。競馬学校の試験も大学受験も、そんな甘いものではないだろう。

それでもやはり、僕は騎手になりたい。無謀に思えても、合格を手繰り寄せるために努力し、挑戦しなければならぬのだと、今の僕は強く確信している。パンサラッサのサウジカップ挑戦は、当初、無謀だと

評された。それまでの彼の戦績にダート競走は一度きりしかも十一着に負けている。そんな馬が、ダートのしかも海外G1に挑むというのだから、非難すらあっただろう。ところが、パンサラッサはいつものように逃げ切った。ダートが本場のアメリカから来たカントリイグラマーをはじめ、カフェアラオ、ジュンライトボルトといったダートのGI馬達に、最後まで追いつかせなかった。不安に心が覆われそうになった時、僕はいつもパンサラッサを思い出す。彼のメチャクチャな大逃げや、成し遂げた偉業や、あの興奮を思い出して、僕はまた頑張ろうと踏み出す。もう彼がレースを走ることなくとも、僕の心に、彼の姿は色褪せることなく、残り続けるだろう。

馬場で乗り順を待っているときの事だ。

「田谷兄って乗馬苑は今年だけなんだよね」

一つ先輩にあたる男の子がそんなことを言った。年齢制限ギリギリで乗馬苑に入った僕には年下の先輩が多い。彼らからよく、「田谷兄」と呼ばれる。

「そうだね。そのとこ、君は長ければあと七年もあるわけだ」

七年もあつたら、僕の事は忘れられてしまうのだろうな、というボヤキが、喉元まで出かかって、しかし引つ込めた。

僕は騎手になろうとしている。

今はただ、自分で選んだ道を行こう。その道がどれほど厳しいものであっても、彼のように走り切ってみせる。その先で、いつかまた、彼らにもであえるだろう。

夏の日差しが容赦なく肌を焼く。

乗り替わりの号令がかかり、僕は今日も、騎乗馬に向かつて歩きます。